高校生を対象とした携帯メールと友人関係に関する調査研究

林　泰子*1　宮田　仁*2　林　徳治

A Survey of the Relationship between E-mail on Mobile Phone and Friendships in High School Students

HAYASHI Yasuko　MIYATA Hitoshi　HAYASHI Tokuji

(Received December 17, 2003)

キーワード：情報教育、携帯メール、コミュニケーション、友人関係

1．はじめに

現代の急速に進展する社会の情報化に対応すべく1999年３月に高等学校学習指導要領の全面的な改定が行われた。とりわけ普通教科「情報」は、「情報社会の一員として必要な能力と態度を、生徒に確実に身につけさせることにある」[1)] と情報活用能力の重要性が取り上げられている。今日では、情報機器や通信技術の進展により学校や家庭などの生徒をとり巻く情報環境は以前に比べ大きく変わりつつある。高度情報通信社会では、我々の仕事や生活が便利で豊かになった反面、様々な社会問題が生じている。例えば、中高生など青少年による携帯電話を利用した事件や犯罪など、今まで我々が経験したことのない新しい形態の社会的問題が多発している。

筆者（林）は、情報教育の目標の柱の一つである情報社会に参画する態度の育成において、現代の高校生における携帯電話との関わりに注目した。そこで勤務校の生徒を対象にして、事前調査「情報通信機器の利用状況」を実施した（2002年４月）。結果より、生徒の75% が携帯電話を所有し携帯メールを頻繁に利用しており、携帯電話による会話やメールを利用したコミュニケーションが日常生活に浸透していることが明らかになった。

本稿では、携帯メールが及ぼす生徒の人間関係に着目し、事前調査と同生徒を対象に実施した「携帯電話による友人とのメール利用の現状」結果（2002年11月）をもとに、携帯メールによるコミュニケーションが友人関係に及ぼす影響について考察した。

2．研究目的

高校生の携帯メールの利用実態を把握し、携帯電話の位置づけを明らかにする。また現代の高校生の友人に対する意識を明確にし、携帯メールによるコミュニケーションが及ぼす交友関係について、どのような関連性があるのかを検証する。

＊１　滋賀大学大学院教育学研究科
＊２　滋賀大学教育学部

3．調査方法・内容

筆者の勤務する高校生1年生全員を対象に、情報教育の授業中にアンケート調査を実施した（2002年11月8日～11月14日）。

有効回答数は、337名（男子67名、女子270名）であった。男女比は、それぞれ20%、80%であった。

調査内容は、基本データとして性別、個人用携帯電話の有無、初めて購入した時期とした。本質問は分類して、Ⅰ.「友人との携帯メールの利用状況」と、Ⅱ.「友達意識」に分けた。携帯電話を所有していない生徒はⅡのみを回答させた。アンケート調査内容は、本文末の資料1に示す。

4．調査結果

4－1．携帯メールに関する調査と結果

生徒の携帯電話の所有率は92%であった。内訳は男子84%、女子94%であった。事前調査結果（4月）の75%から半年間で17%増加しており、携帯電話の急速な浸透が伺える。また所有者全員が、携帯メールを利用していた。

初めて購入した時期は、中学時代であるという回答が62%、高校入学後は35%であった。男女の内訳では、女子は65%が中学時代、33%が高校時代、男子は50%が中学時代、46%が高校時代であった。結果より、女子の方が早くから携帯電話を所有していることが明らかになった。

次に、Ⅰの質問項目内容と観点についてまとめたものを表4－1に示す。(1)～(10)の質問項目が目的とした把握する観点において、その内容に該当する項目番号を示した。

表4－1　アンケートの観点と内容

項　目	把握する観点	内　　容	該当項目
(1)～(4)	携帯メールの利用実態	数（頻度、人数*3）	(2), (3)
		状況	(1), (4)
(5)～(10)	メール交信相手との親密度	送信相手の順位性	(5), (6)
		友人作り、コミュニケーション	(7), (10)
		親密度に関する直接的質問	(8), (9)

＊3　本稿では、日常に携帯メールで交信している友人をメル友と呼ぶ。

Ⅰ.「友人との携帯メールの利用状況」の(1)〜(10)の質問項目と、その結果を男女別に相対度数を用いて、図４－(1)〜図４－(10)に示す。

(1)メールは、主にどんな時によく使いますか？（該当するもの３つ）
(2)友人たちとは、１日に何回くらいメールのやり取りをしますか？（１日の合計）

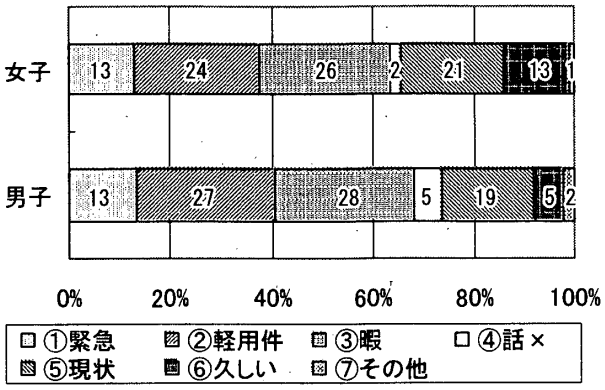

図４－(1)　どんな時に利用？

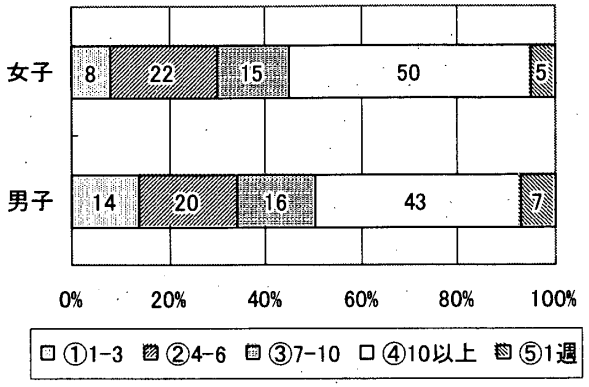

図４－(2)　メールの回数

(3)よくメールのやり取りをする友人の人数は、およそ何人くらいですか？
(4)主にどこにいる時に、メールを書きますか？

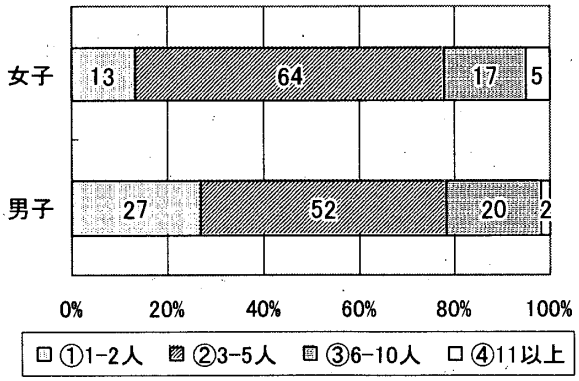

図４－(3)　メル友数

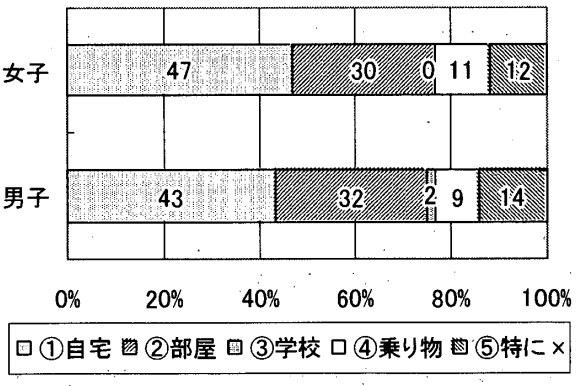

図４－(4)　どこで書く？

(5)緊急な用件でない着信メールには、直ぐに返信しますか？
(6)どういう人に、長い内容のメールを書きますか？

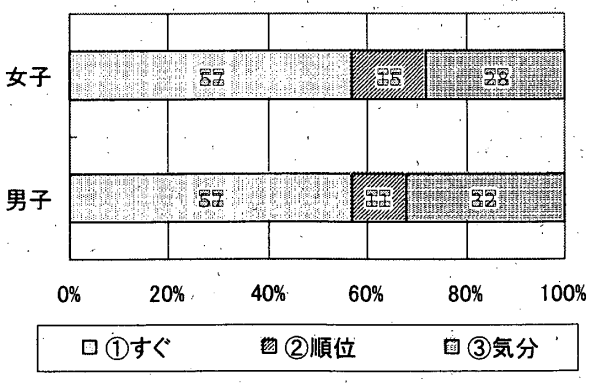

図４－(5)　返信について

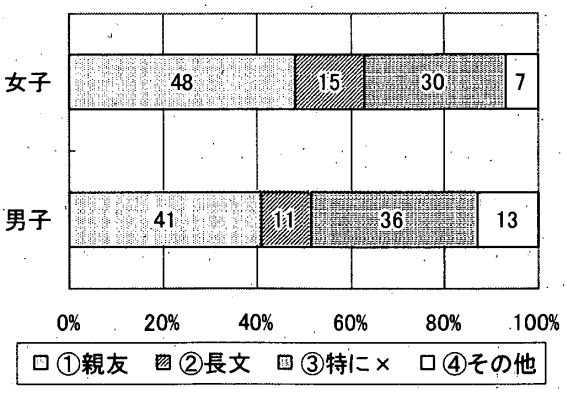

図４－(6)　長文相手

(7)メールアドレスはどんな時に教えますか？
(8)メールの返信を直ぐくれる人との方が、親しい友人になりやすいと思いますか？

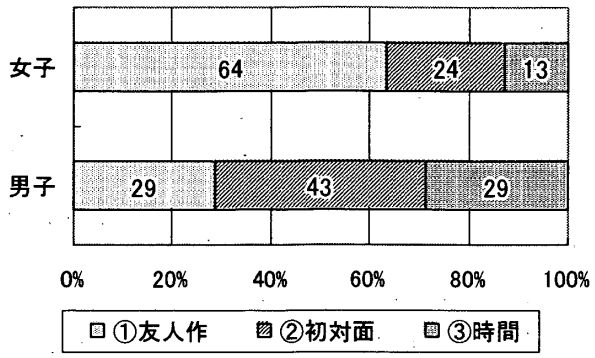

図４－(7)　アドレス交換

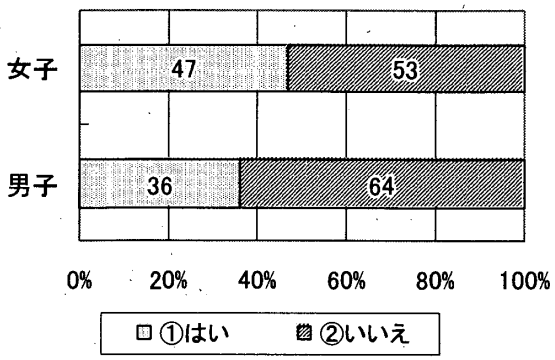

図４－(8)　即返答

(9)メールをよく交換する友人との方が、より親しい友人になると思いますか？
(10)メールの内容に主にどのような事柄を書きますか？（該当するもの３つ）

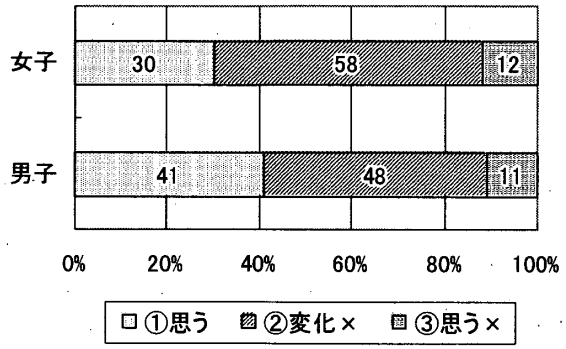

図４－(9)　親密感

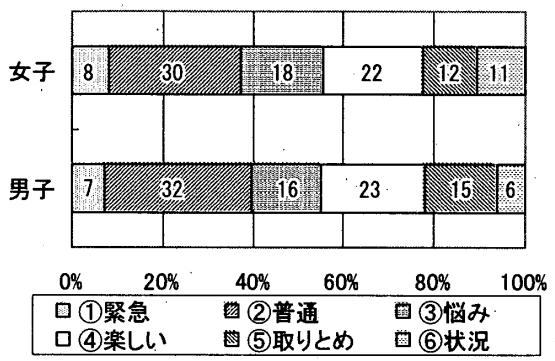

図４－(10)　メールの内容

本アンケート調査の結果から、次のようなことが明らかになった。
携帯メールの利用において、質問(7)以外は男女間にほとんど差異がなかった。約75%が自宅や自分の部屋から(4)、特別な内容や必要性も無く(1)(10)送信しており、頻繁に交信する相手は「３～５人」(3)が最も多く、ほぼ半数が１日10回以上(2)交信していた。このことから、ある程度限られた人との日常会話的なメール交信が中心になっていると考えることができる。また、約60%が着信メールに即答し(5)、約45%が親しい友人には長文を書くが(6)、それがより親密な友人関係を作る要因であるとは考えていない(8)(9)。

質問(7)の「メールアドレスはどんな時に教えますか？」では、男女に大きな差がみられた。「友達になるために交換」では女子64%、男子29%と、女子は男子に比べて倍以上が友達作りのための第一歩と考えているのに対し、「初対面でも聞かれたら教える」では女子24%、男子43%と女子の倍近くの男子が気楽に教えている。しかし「気心が知れてから」では、女子13%、男子29%というように、女子の回答のなかでは１番低い結果となり、男子においては「友達作りのため」と同じ結果が出た。これは男子の方がメールアドレスという個人情報、もしくはメールアドレスを教えるという行為に対して、友達を新しく作るための手段と考えていない傾向が見られる。

4－2．友人関係に関する調査と結果

Ⅱの友人との交流の実態を把握するための質問項目*4は、岩田考の調査項目[2)]を引用・参考し、回答は4件法で求めた。表4－2に質問項目と分析時の変数名を、図4－(11)にその結果を示す。

表4－2　質問項目と変数名

質　問　項　目	変数名
(1)少数の友人より、多方面の友人と色々交流する	交　流
(2)友人関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない	深　度
(3)付き合いの程度に応じて、友人と話す内容は違うことが多い	話内容
(4)いろいろな友人と付き合いがあるが、友人同士はお互いに知り合いでない	周　辺
(5)友人といるより、一人でいる方が気持ちが落ち着く	一　人
(6)友人と一緒にいても、別々のことをしていることが多い	別　々
(7)一人の友人との深い付き合いを大事にするより、広く浅く付き合うほうである	広　狭
(8)友人の数は比較的多い	友人数
(9)ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話すことがある	熱　中

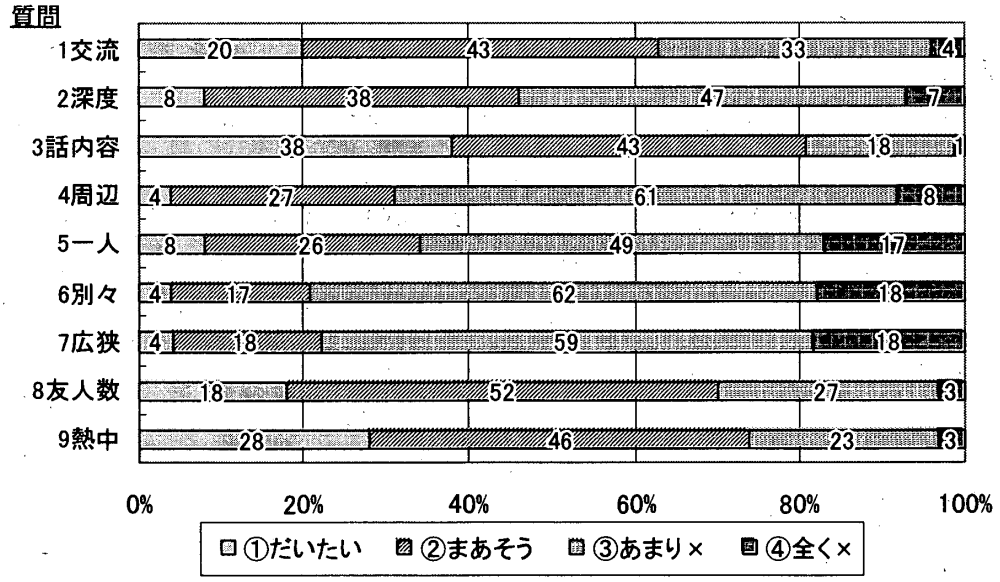

図4－(11)　友人関係

友人関係に関する意識を意味的構造論をもとに考察するため、回答の「だいたいそう」「まあそう」「あまりそうでない」「全くそうでない」をそれぞれ4点、3点、2点、1点と得点化し、因子分析を行った。表4－3に、得られた3つの因子とその因子負荷量を示す。

＊4　質問項目(4)は、個人の友人関係において、グループなど領域が違う友人同士の関係を調べる内容として新たに加えた。

表４－３　友人関係の因子構造

	因子1	因子2	因子3
(5)一人	0.578	0.229	0.077
(6)別々	0.499	0.313	0.159
(2)深度	0.479	0.274	−0.142
(1)交流	−0.500	0.522	−0.159
(8)友人数	−0.519	0.434	0.010
(7)広狭	0.136	0.433	−0.316
(4)周辺	0.176	0.415	0.080
(3)話内容	0.038	0.155	0.515
(9)熱中	−0.272	0.166	0.445

因子１の(5)(6)(2)(1)(8)は友人数や交流も負の関係であり、友人関係を作ることに消極的であると考えられる。因子２の(1)(8)(7)(4)は、友人数や交流が正の関係の場合であり、個人としては幅広く友人関係があるが、それぞれの領域での友人はお互いに交流が無いという個人化傾向が見受けられる。因子３の(3)(9)は友人関係の領域や状況に応じて対応することができていると考えられる。そこで、それぞれの因子を因子１＝「消極的関係」、因子２＝「個人的関係」、因子３＝「適応型関係」と命名した。

５．考察

上記までは、高校生の携帯メールの利用実態と友人関係について、それぞれの結果を分析し明らかにしてきた。そこで、携帯メールによるコミュニケーションの形態と友人関係の関連性を明確にし、影響を及ぼしている要因を検証し考察する。

表４－３の因子負荷量において(1)(8)は因子１と因子２とに正と負の関係があり、絶対値から見た差が僅差であることから、この２項目を除いた変数で各因子を「消極的関係」「個人的関係」「適応型関係」とした。またメール送信回数①１～３回を２点②４～６回を３点③７～10回を４点④10回以上を５点⑤１週間に数回を１点、メル友数①１～２人を１点②３～５人を２点③６～10人を３点④11人以上を４点と得点化し、３つの因子との相関関係を調べた。結果を表５－１に示す。

表５－１　相関関係　　(有意性：** p<.01, * p<.05)

	メール数	メル友数	消極的関係	個人的関係	適応型関係
メール数					
メル友数	.2222 **				
消極的関係	−.1440 *	−.0707			
個人的関係	.0387	.1715 **	.3580 **		
適応型関係	.1664 **	.1083	−.0079	−.0198	

メール数とはメル友数（p<.01)、適応型関係（p<.01)、消極的関係（負の相関 p<.05)、メル友数とは個人的関係（p<.01)、消極的関係とは個人的関係（p<.01）に相関関係が見られた。メール数が多いのはメル友数が多いという相関は、当然の結果であると考えられる。さらに携帯メールのコミュニケーションと人間関係において、３因子との因果関係を明らかにするためにメール数とメル友数をそれぞれ従属変数とし、消極的関係、個人的関係、適応型関係を独立変数とした重回帰分析を行った結果を表５－２に示す。

表５－２　メール数、メル友数に対する３因子の影響

独立変数 / 従属変数	消極的関係	個人的関係	適応型関係
メール数	－.1808 **	.1068	.1671 **
メル友数	－.1515 *	.2280 **	.1116 *

（数値：標準偏回帰係数　　有意性：** p<.01, * p<.05)

メール数には消極的関係(p<.01)、適応型関係(p<.01)、メル友数には消極的関係(p<.05)、個人的関係（p<.01)、適応型関係（p<.05）に有意性が示された。メールやメル友の数には負の数値で消極的関係が起因しており、携帯メールのコミュニケーションにおいてメール数やメル友数が多いのは、社交的な友人関係を築いていることが基本となっていると解釈できる。

携帯メールの利用実態は、緊急でない用件を伝える以外には、暇つぶしや、リアルタイムでの自分に起こっている状況、感情などを送信していることが多い。おもに自宅や自分の部屋にいて、友人から離れて一人になった時である。メル友数に個人的関係が寄与しているが、メール数には有意性が無いことから、必ずしも毎回違う相手と交信しているわけではないと考えられ、多面的な領域の交流によりメル友数が多いということである。また、メール数が多いことに適応型関係が寄与していることから、相手や状況に応じた対応で話が弾み、同じ相手と数回の交信に至っていると考えられる。携帯メールをよく交信する人と親密度が増すとは思っていないことや、その回数にかかわらずほとんどが３～５人と限定した友人とメール交信をしているという利用実態の結果からも推察することができる。

Ⅱ－⑽の親友に対する質問項目（表５－３）では、親友の条件として「楽しい」「悩みや秘密を打ち明ける」ことに、どちらも生徒の約８割が必要性を持っており、親友の２大条件であることが把握できる。「苦しいことは協力し合う」「悪いところは注意しあう」には４割前後の必要性しか示されなかったが（図５-(1))、これは３つまでしか選択できないために双方に分裂したと読み取ることができ、「希薄化」の傾向があるとは断定できない。一方、友人関係には個人的関係と消極的関係に相関（p<.01）があるのは「親友」と「友人」の違いによるものであると考慮できる。携帯メールのおもな内容は「普通の用件」や「楽しいこと」であることから、「友人」との繋がりを重視しているといえる。

表５－３　親友に対する質問項目

Ⅱ－⑽親友に必要な条件（３つ○）
①話していて楽しい
②苦しいことは協力しあう
③悩みや秘密を打ち明けあえる
④共通の趣味・関心を持つ
⑤悪いところは注意しあう
⑥お互いに相手に甘えない

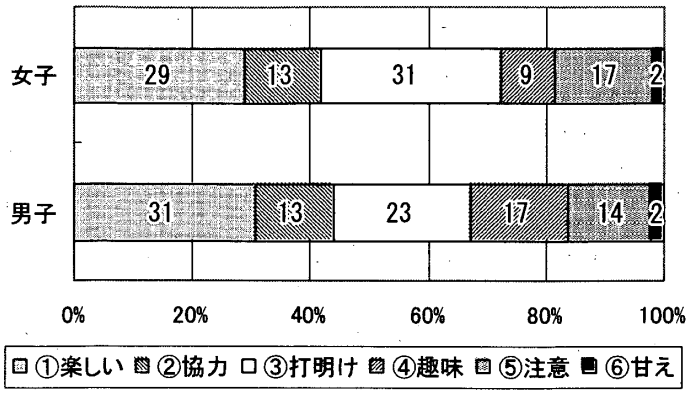

図５－(1)　親友に必要な条件

６．まとめ

携帯電話は、空間や時間を超えて同期、非同期のコミュニケーションツールとして個人と個人をダイレクトに繋ぐ親和性の高いプライベートなものである。本研究により、携帯電話は、対話、携帯メールによる文書交換を通して、即時性、利便性に優れた特性を持ち、コンサマトリー（即時充足的）な利用[3]がなされていることが明確になった。

なかでも携帯メールによるコミュニケーションは、本人を主体とした楽しさや、対面を介さないでも気軽に行えるという点で、個人的な人間関係における多面的な領域の友人との交流を拡大できる、新しいコミュニケーション活動であるといえる。このように携帯メールでの希薄化傾向にある個人的な人間関係やコミュニケーション活動がますます社会や生活に浸透する中で、高校生は様々な事件に巻き込まれる可能性を含んでいる。例えば「出会い系サイト」や「ネットショッピング」などにより、生徒自身が加害者にも被害者にもなる可能性を秘めている。

今日の高・大学生で腕時計をもたない者が目立つ。彼らにとって携帯電話は、時計、辞書、筆記用具、手帳、カメラに加え、最近ではテレビを包括した生活必需品であることは間違いない。携帯電話が、単に電話としてのコミュニケーションツールからインテリジェンスコミュニケーションツールに変貌していることは周知のところである。通信業界も、若者をターゲットとした新しいストラテジーで機器の開発やサービスの向上に躍起である。このように携帯電話の普及によって我々のコミュニケーション活動は、大きく様変わりしてきた。

高校では、情報教育を通してコンピュータなどの基本的な操作技術の習得、情報の収集・選択・処理加工・発信の実践に加え、情報そのものの信憑性や情報モラル、携帯電話やコンピュータなど身の回りのメディアが利用されている社会的背景での「光」と「影」を総括した学習の必要性があると提言する。指導する教師側においては、情報通信社会での「光」の部分である利便性の学習に偏らず、「影」の部分が引き起こしている様々な社会問題を的確に捉えた教材化の推進と、生徒の実態やレディネスを十分把握した学習内容や効果的な指導方法が重要である。高校の情報教育では、生徒自身が高度情報通信社会で被害者や加害者にならないよう主体的に対応し、参画していくことができる実用的な学習内容で構成されるべきであろう。

本研究を通して、高校生にとって携帯電話は生活面で身近なインテリジェントコミュニケーションツールとしての位置づけであることが明らかになった。今後は、宮田が行って

いる携帯電話を学習場面で活用した方策について検討することが大切である。携帯電話は、生徒にとって情意・関心面から有用なツールであるため、これを学習に活用することで、生徒の教科学習において知識理解面での認知領域の伸長に期待できると考える。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、分析方法に指導助言をいただきました滋賀大学教育学部千原孝司教授に、深く感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

1）文部省：「高等学校学習指導要領解説情報編」、2000
2）深谷昌志監修：「モノグラフ・高校生 VOL.56——友人とのつきあい方」ベネッセ教育研究所、1999、p.33
3）辻大介、三上俊治：「大学生における携帯メール利用と友人関係～大学生アンケート調査の結果から～」、　第18回情報通信学会大会、2001

［1］岩田考:深谷昌志監修「モノグラフ・高校生 VOL.56」「第３章友人関係の現在」ベネッセ教育研究所、1999
［2］松田美佐：「若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的関係論へ」、社会情報学研究第４号、2000
［3］橋元良明、船津衛、辻大介：「子ども・青少年とコミュニケーション」北樹出版、1998
［4］竹内郁郎、児島和人、橋本良明：「メディア・コミュニケーション論」北樹出版、1999
［5］林徳治・宮田仁：「情報教育の理論と実践」、実教出版、2002
［6］宮田仁：「携帯電話対応コメントカードシステムを活用した多人数講義における授業コミュニケーションの改善」、日本教育情報学会誌第18巻第３号、2002

【資料１】

携帯電話（PHS も含む）による「友人とのメール利用の現状」を調査しています。アンケートに御協力下さい。

☆　あなたの性別はどちらですか？

①男性　　②女性

☆携帯電話を持っていますか？

①持っている－－－－－（ａ）いつ頃から持っていますか？

（a-1）小学生、　（a-2）中学生　　（a-3）高校生

②持っていない

★携帯電話を持っていると答えた人は、Ⅰ　Ⅱの両方の質問に、持っていない人はⅡの質問だけに答えてください。

Ⅰ．友人との携帯電話による「メール」について質問します。

（１）メールは、主にどんな時によく使いますか？（該当するもの３つまで○）

①緊急の用事があるとき　　②一刻を争う用件でもないが、用事があるとき

③暇なとき（くつろいでいる時）　④特に電話で話したいと思わない人に連絡するとき

⑤今の現状を直ぐに伝えたいとき（楽しいこと、怖いことなど）

⑥久しぶりの人に対する、様子伺いのメール

⑦その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（２）友人たちとは、１日に何回くらいメールのやり取りをしますか？（１日の合計）

①１～３回　②４～６回　③７～１０回　④１０回以上　⑤１週間に数回

（３）よくメールのやり取りをする友人の人数は、およそ何人くらいですか？

①１～２人　②３～５人　③６～１０人　④１１人以上

（４）主にどこにいる時に、メールを書きますか？

①自宅　②自分の部屋　③学校　④電車やバスなどの中　⑤特になし

（５）緊急な用件でない着信メールには、直ぐに返信しますか？

①誰でも直ぐに返信する　②友人の優先順位によって考える

③返信したい気分の時だけ

（６）どういう人に、長い内容のメールを書きますか？

①親しい友人　②長いメールを書いてくる人　③特に無し　④その他＿＿＿＿＿＿

（７）メールアドレスはどんな時に教えますか？

①友達になるためにアドレスを交換するとき　②初対面でも聞かれたら教える

③時間を経て、気の合う友人となったときに教える

（8）メールの返信を直ぐくれる人との方が、親しい友人になりやすいと思いますか？
①はい　　②いいえ

（9）メールをよく交換する友人との方が、より親しい友人になると思いますか？
①思う　　②特に変わらない　　③思わない

（10）メールの内容に主にどのような事柄を書きますか？（該当するもの3つまで○）
①緊急の用件　　②普通の用件　　③悩みや秘密を打ち明ける
④楽しいこと　　⑤とりとめもないこと　　⑥今の状況説明

Ⅱ. あなたの「友達」意識に質問します。

（1）少数の友人より、多方面の友人と色々と交流するほうである
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（2）友人関係はあっさりしていて、お互い深入りしない
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（3）付き合いの程度に応じて、友人と話す内容は違うことが多い
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（4）色々な友人と付き合いがあるが、その友人同士はお互いに知り合いでない
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（5）友人といるより、一人でいる方が気持ちが落ち着く
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（6）友人と一緒にいても、別々の事をしていることが多い
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（7）一人の友人との深いつきあいを大事にするより、広く浅く付き合うほうである
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（8）友人の数は比較的多い
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（9）ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話すことがある
①だいたいそう　②まあそう　③あまりそうでない　④全くそうでない

（10）親友に必要であると思われることは？（該当するもの3つまで○）
①話していて楽しい　　②苦しいことは協力しあう
③悩みや秘密を打ち明けあえる　　④共通の趣味・関心を持つ
⑤悪いところは注意しあう　　⑥お互いに相手に甘えない